March 2020

Verification report on
the effects of
holding Japan Cultural Expo
March
2020

「日本博」開催に係る効果検証報告書［概要版］

JAPAN CULTURAL EXPO

「日本博」開催に係る効果検証報告書

令和二年三月［概要版］

独立行政法人
日本芸術文化振興会
Japan Arts Council

Verification report on
the effects of
holding Japan Cultural Expo
March
2020

目次

Ⅰ 「日本博」について …… 01
1. 開催概要 …… 01
2. 「日本博」に期待される効果 …… 01
Ⅱ 効果検証の枠組み …… 02
Ⅲ 主な調査結果 …… 03
1. 事業者アンケート …… 03
2. 事業者ヒアリング
京都国立近代美術館●円山応挙から近代京都画壇へ VRと日本画技法体験プロジェクト …… 06
東京国立博物館●日本文化体験「日本のよろい!」 …… 08
公益社団法人日本芸能実演家団体協議会●日本遺産を活かした伝統芸能ライブ NOBODY KNOWSプロジェクト …… 30
奈良県●古代から令和の時代までつながる文化を巡る奈良博覧プロジェクト …… 12
大地の芸術祭実行委員会●越後妻有雪花火／Gift for Frozen Village2020 …… 34
すみだ北斎美術館●「綴プロジェクト」―高精細複製画で綴る―スミソニアン協会フリーア美術館の北斎展 …… 36
大阪市立住まいのミュージアム●特別展「世界遺産をつくった大工棟梁―中井大和守の建築絵図細見」 …… 37

火焔型土器
出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）を加工して作成

Ⅰ 「日本博」について

1. 開催概要

「日本博」は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京2020大会」という。）の開催を契機に、「日本の美」を体現する美術展・舞台芸術公演、文化芸術祭等のプロジェクトを総合テーマ「日本人と自然」の下、日本が誇る「縄文から現代」までの様々な文化を、四季折々・年間を通じ、日本全国で体系的に展開する事業である。開催時期は、東京2020大会の開催年を中心としつつ、その前後の期間も含めて幅広く展開する。

(1) 総合テーマ：「日本人と自然」

(2) 基本コンセプト：

「日本の美」は、縄文時代から現代まで1万年以上もの間、大自然の多様性を尊重し、生きとし生けるもの全てに命が宿ると考え、それらを畏敬する「心」を表現してきた。

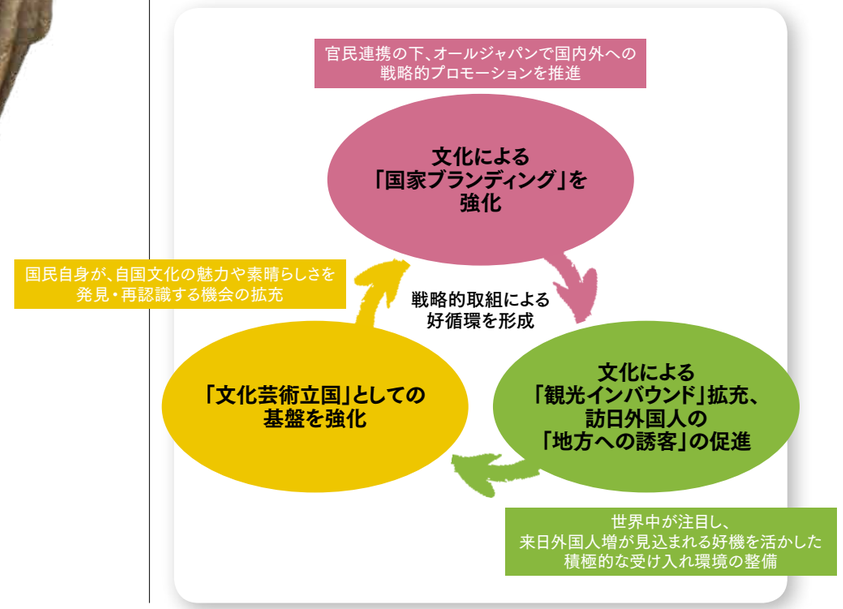
日本は、景観や風土を大切にし、縄文土器をはじめ、仏像などの彫刻、浮世絵や屏風などの絵画、漆器などの工芸、着物などの染織、能や歌舞伎などの伝統芸能、文芸、現代の漫画・アニメなど様々な分野、衣食住をはじめとする暮らし、生活様式等において、人間が自然にたいして共鳴、共感する「心」を具現化し、その「美意識」を大切にしている。

「日本博」では、総合テーマ「日本人と自然」の下に、「美術・文化財」「舞台芸術」「メディア芸術」「生活文化・文芸・音楽」「食文化・自然」「デザイン・ファッション」「共生社会・多文化共生」「被災地復興」などの各分野＊にわたり、縄文時代から現代まで続く「日本の美」を国内外へ発信し、次世代に伝えることで更なる未来を創生する。

この文化芸術の祭典が、人々の交流を促して感動を呼び起こし、世界の多様性の尊重、普遍性の共有、平和の祈りへとつながることを希求する。

＊本報告書では、日本博事業で設定した上記8分野を表す際に「分野」と表記する。

2. 「日本博」に期待される効果



Ⅱ 効果検証の枠組み

日本博事業では、日本文化の展示・公演・体験事業等が実施されているとともに、年齢、性別、国籍、言語等の違いを越えた様々な活動や、訪日外国人向けの活動、そして日本文化の認知を広めるためのプロモーション活動が実施されている。こうした活動は、直接的な事業収入の確保や来場者数の拡大をもたらすだけでなく、文化芸術の発展や社会及び経済に多様な影響を与えている。

本調査では、上記の状況及び有識者の意見を踏まえ、既存の国内外事業で活用されている各種の効果指標に加え、社会的インパクト評価の考え方を組み入れた検証を行う。

具体的な検証については、事業の成果（事業量、参加者数、訪日外国人数、事業収入、経済波及効果など）と、その結果、地域の文化、社会、観光インバウンド及び経済にどのような影響を与えたかを測ることにより実施する。

初年度である令和元年度は、検証に用いる指標及び方法等を提示するとともに、本事業開催の進捗状況等のフォローアップ及び効果検証を行った。

◉ 文化・社会・観光インバウンド拡充・経済面での効果

文化的効果
- 日本文化の魅力の国際的な発信力強化
- 創作／企画力強化、新技術導入
- 人材育成、伝統文化継承
- 文化芸術を支える体制構築

…など

社会的効果
- シビックプライドの向上
- 社会的包摂・共生社会の進展
- 次世代育成
- 多世代、域内の交流促進
- 市民協働の促進

…など

観光インバウンド拡充
- 海外での日本の文化の認知向上
- 地域の認知、集客力向上
- 外国人向けのプログラム及びプロモーションの開発力向上

…など

経済的効果
- 地域ブランド力、国際発信力向上
- 交流人口の拡大
- 商業、観光業、飲食業発展
- 文化関連産業の発展
- 地域資源の活用拡大

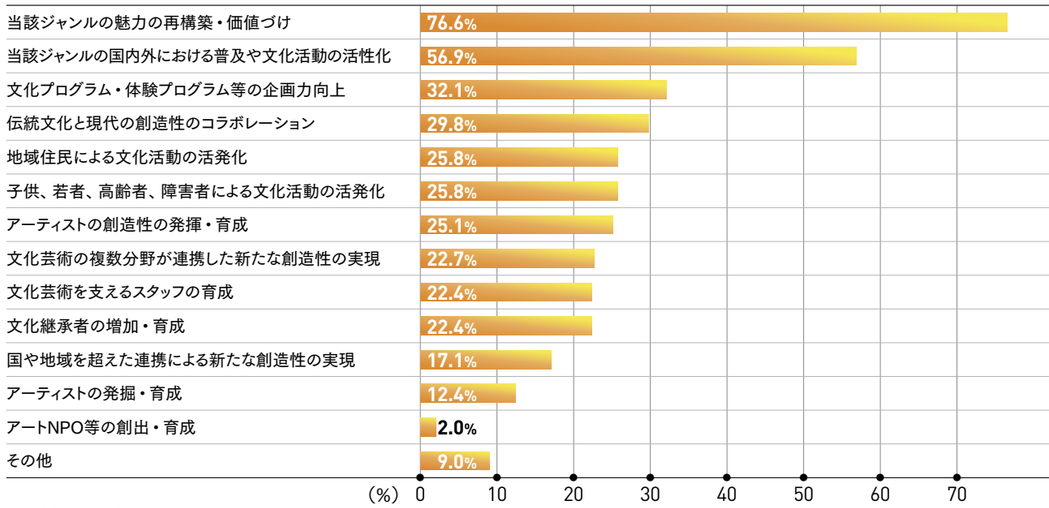
…など

葛飾北斎「冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏」すみだ北斎美術館蔵

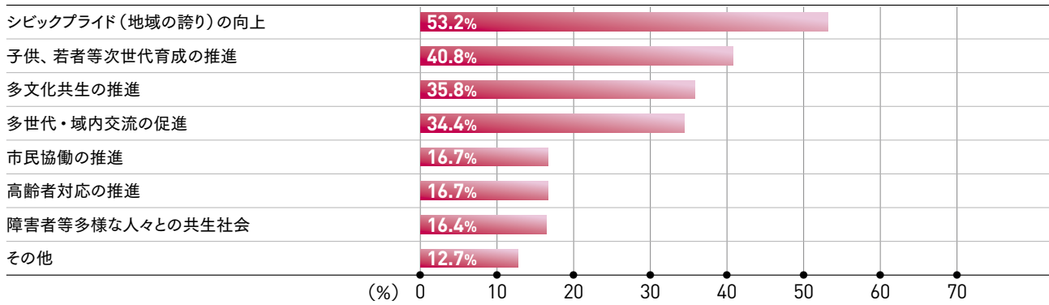
Ⅲ 主な調査結果

1. 事業者アンケート

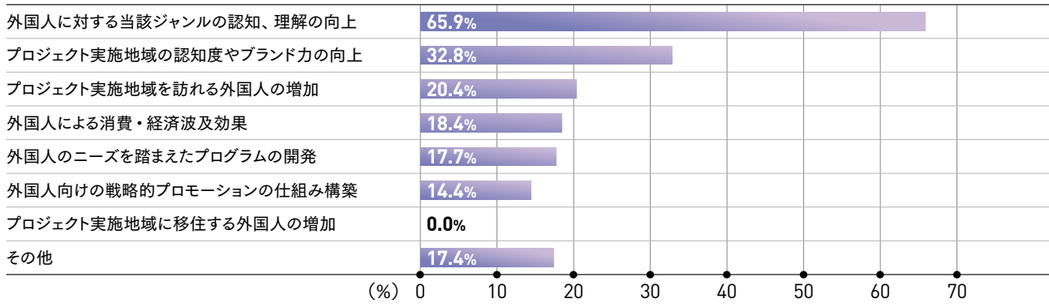
◉ 文化芸術の本質的価値に関わる効果 N＝299（複数回答）



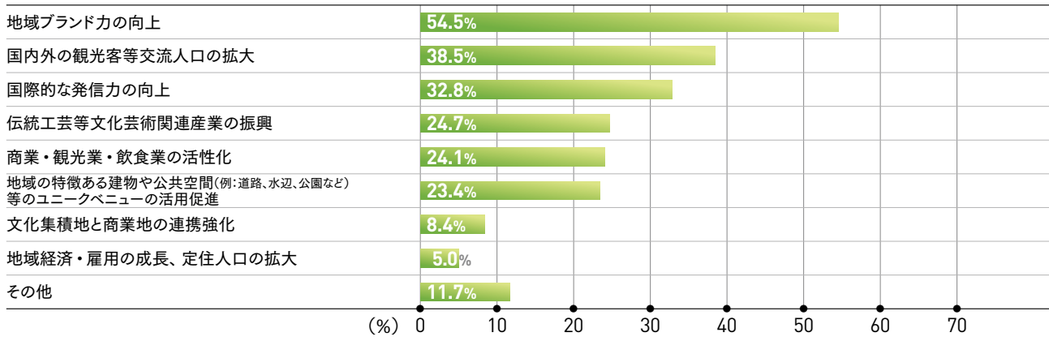
◉ 社会的効果 N＝299（複数回答）



◉ 観光インバウンド拡充効果 N＝299（複数回答）

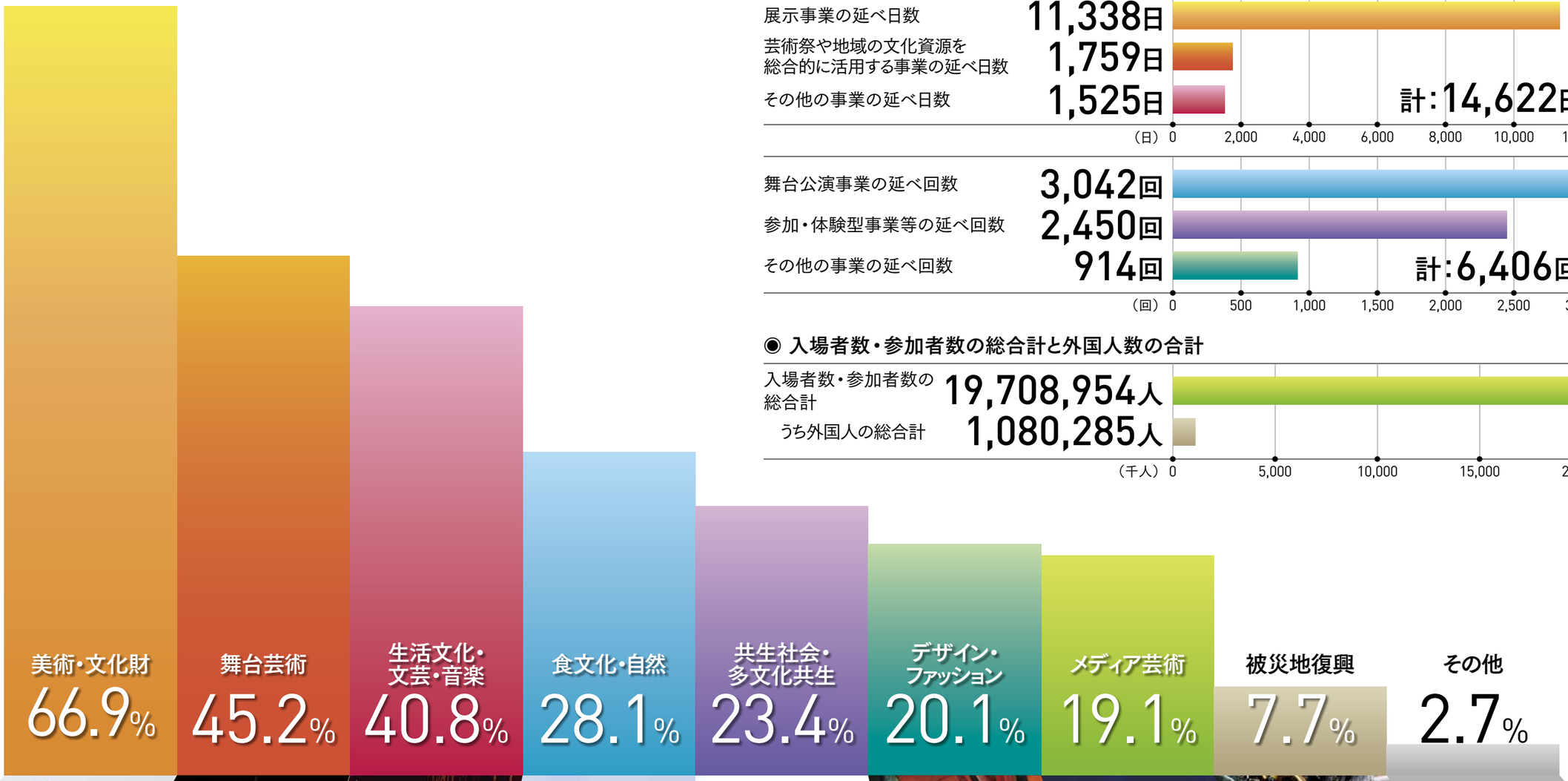


◉ 経済的効果 N＝299（複数回答）



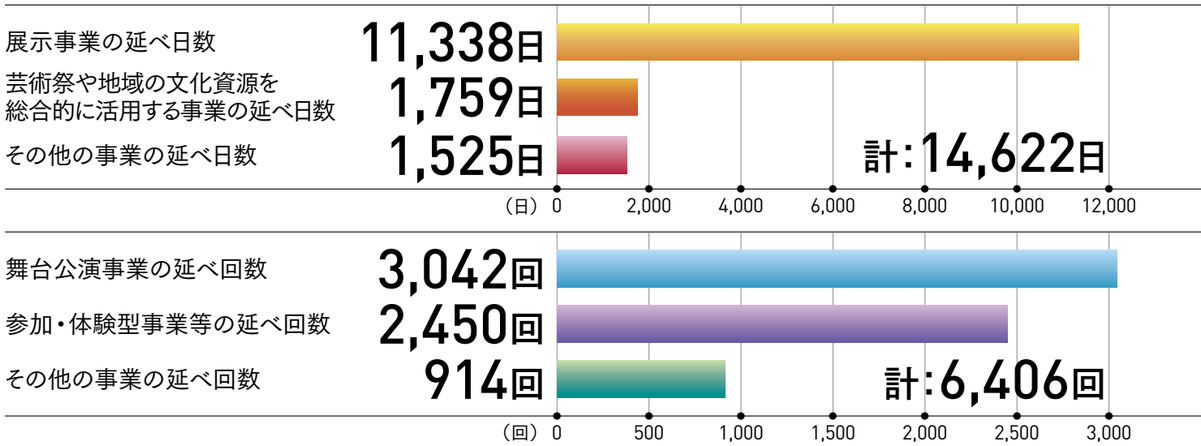
◉事業の分野

（N＝299）複数回答



樫鳥糸肩赤威胴丸 出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）を加工して作成

◉ 延べ日数・回数の合計 N＝299



◉ 入場者数・参加者数の総合計と外国人数の合計

円山応挙から近代京都画壇へ VRと日本画技法体験プロジェクト

京都国立近代美術館

◉プロジェクトタイプ：
主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：美術・文化財
◉開催期間：2019年11月2日～12月15日
◉来場者数：東京会場 76,918人（うち外国人 1,500人）
京都会場 60,122人（うち外国人 1,000人）

◉事業概要：
本事業は、「円山応挙から近代京都画壇へ」展の関連事業である。展覧会は、円山・四条派の全貌に迫るとともに、その始まりから近代京都画壇にいたる様相を明らかにする試みであった。この展覧会を深く理解する関連事業として、第一に、大乗寺（兵庫県）の襖絵を360度VR技術で再現展示し、襖絵群を立体的に体験する機会を提供した。第二に、日本独自の絵画技法に親しめるよう、日本画技法体験プログラム（以下、体験プログラム）を実施した。両事業により、日本美術に関する理解をより深められる機会となった。

展示風景

VR展示ブース

本物の画材を使用

1 特徴的な取組

● VR展示では、襖絵を360度見渡すだけではなく、スマートフォンでQRコードを読み込み、画面とそれを観る人の動きを同期できる技術によって、大乗寺の襖絵群をその場で体感しているかのような、ダイナミックな鑑賞体験の提供を目指した。
● 体験プログラムは、国内で初めて、東京藝術大学大学院美術研究科保存修復日本画研究室協力のもと行われた。同研究室の講師が日本独自の絵画技法を解説・実演し、それに従い参加者が絵を制作する内容だったが、岩絵具など本物の材料を用いたことが特徴的である。

2 文化的効果

● 実際とは異なる場所において、作品とそれを取り巻く空間を一体的に体感できるという観点から、VR映像によって得られる鑑賞体験は作品をより理解する上で有効であるとわかった。また、本事業のVR映像は、円山応挙を紹介する他の展覧会等への貸出しを想定しており、応挙作品鑑賞ツールとして幅広い活用が期待される。
● 多言語対応で実施した体験プログラムは、本事業での成果を基本パッケージとして、今後も日本独自の絵画技法を体験できるコンテンツとして国内外での利用に対する提供を視野に入れていく。

3 社会的効果

● 大乗寺監修のもと、官民連携で最先端技術を文化施設において活用することで、美術館にいながら実際に作品が置かれた空間そのものを体感でき、美術鑑賞の幅が広がった。
● VR映像では大乗寺がある兵庫県美方郡香美町香住区の自然風景を紹介し、同地域の魅力を発信した。

4 観光インバウンド拡充

● 広報物、VR展示の音声情報及びキャプションを4か国語（日・英・中・韓）で作成した。外国人を京都国立近代美術館だけでなく、大乗寺とその周辺地域へ誘引する契機となった。
● 体験プログラムでは、東京藝術大学の学生が講師の指導・手ほどきを的確かつわかりやすく同時通訳し、好評を得た。［注：同時通訳の利用は英に留まった。］

5 経済的効果

● 広報物では、大乗寺及び兵庫県美方郡香美町香住区の魅力を紹介し、併せて同地域に直接アクセスできるよう、香美町香住観光協会のウェブサイトURLを掲載した。VR展示を鑑賞した方が実際に大乗寺へ足を運ぶ機運を高め、同地域への誘客を促進した。

多言語対応のチラシ

日本文化体験「日本のよろい!」

東京国立博物館

◉プロジェクトタイプ：
　主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：美術・文化財
◉開催期間：2019年7月17日～9月23日
◉来場者数：144,733人（うち外国人 51,312人）
◉来場者インタビュー動画：
https://www.youtube.com/watch?v=Wuy1HchqZK0&t=3s

現代に作られた鎧にさわることができる

◉事業概要：
日本人の美意識やものづくりの結晶である鎧（よろい）。東京国立博物館で開催された日本文化体験「日本のよろい!」展では、鎧がもつ美しさや機能性をあますところなく伝え、来場者を魅了した。鎧の美や機能性を生み出す技術や技法をわかりやすく紹介するほか、体験型展示では、伝統的な技法をふまえて現代に作られた鎧や兜に実際に触れるハンズオン展示や、鎧の着用体験により、「防具としての機能性」と「武士が追求した美」が共存する日本独自の甲冑の魅力を体感する参加型展示であった。

鎧の着用体験

子供用のサイズも用意

家族連れで賑わう会場

1 特徴的な取組

● 日本の鎧の機能性と美を理解してもらうことに注力し、江戸時代以前に製作された鎧の展示はもちろん、精巧なパーツ見本や着用できる鎧を製作。着用できる鎧は子供用も含め4サイズ揃えるなど、体験型プログラムの実施により、日本文化への理解や文化財活用の新たな手法の開発を促進した。
● 会場の模様を撮影した動画をYouTubeで公開。体験された外国人のインタビューも含むかたちで制作し、訪日外国人の誘客を図った。

2 文化的効果

● 今回製作した鎧は、武器武具の研究員や専門家が細部にこだわって仕様書を作成し、パーツ見本は鎧修理の技術保持者が製作。鎧の技術・技法の伝承や人材育成に寄与した。
● 他館の学芸員や教育担当者からの問合せも多く、経験や情報を積極的に発信する意向である。
● 2020年度は「よろい」をテーマに含む参加型展示『まるごと体験!日本の文化』を開催予定。会期後も日本文化をテーマにしたコーナーの定期開催を構想中である。

3 社会的効果

● 障害のある方々の来場者数は、日本人・外国人ともに想定以上であった。
● 導線への配慮やハンズオン展示の充実、また、点字や大きな文字のブックレットを用意することによる、子供や障害者を含む様々な人に向けた、日本文化の理解促進に繋がる体験型コンテンツの創生が重要と考える。

4 観光インバウンド拡充

● これまでの経験から、靴の脱ぎ方、キャンセルポリシーなど、外国人向けのオペレーションを工夫。外国人来場者からは「素晴らしい博物館なので、友人に紹介する」など高評価を得た。
● 来場者の約3～4割が外国人来場者であり、滞留時間が長い傾向がみられた。
● 当館では外国人来場者の増加を受け、館内の展示室や作品を解説する日・英・中・韓4ヵ国語対応の音声ガイド（スマホアプリ）の無料提供を開始。

5 経済的効果

●「ナショナル・ギャラリーだから来た」という人が多く、インターネットでのチケット販売を開始したことで、海外でチケットを購入して来場する人も出てきた。

ハンズオン体験コーナー

日本遺産を活かした伝統芸能ライブ NOBODY KNOWSプロジェクト

公益社団法人
日本芸能実演家団体協議会（芸団協）

◉プロジェクトタイプ：
主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：舞台芸術
◉開催期間：
高山公演（日下部民藝館、2019年9月23日）
南砺公演（井波別院瑞泉寺、10月6日）
倉敷公演（箭田大塚古墳、10月13日）
伊勢原公演（大山阿夫利神社下社・東学坊、10月26日）
鶴岡公演（出羽三山神社・三神合祭殿、11月2日）
豊後高田公演（天念寺、11月30日）
◉来場者数：1,274人（うち外国人 40人）

鶴岡公演
半能「葛城」の上演

◉事業概要：
民俗芸能をはじめとする地域の多様な文化は、観光資源として大きな潜在力がある。しかし、その魅力はまだ多くの人に周知されているとはいいがたい。芸団協は「NOBODY KNOWSプロジェクト」を全国6地域で連続開催した。各地域では、日本遺産の伝統建築や史跡等を舞台に伝統芸能や地域芸能を中心とする公演を行うとともに、日本遺産を構成する文化財を中心とするガイドツアー、伝統技術や食・生活文化・信仰文化等の体験ワークショップ、地域住民や出演者を交えた交流会等を実施し、地域への関心を喚起した。

メインビジュアル

豊後高田公演
修正鬼会「火合わせ」

倉敷公演
竹林をライトアップ

1 特徴的な取組

● 「NOBODY KNOWS」には「その場に行かなければ味わえない瞬間」や「まだ知られていない」という意味が込められている。当該地域での唯一無二の体験の提供などで、新たな“ライブ・ツーリズム”の可能性を拡大した。
● 伝統芸能を中心としたライブでは、敷居が高い、馴染みがないといったイメージを変えることに注力した。地域芸能・伝統芸能を再解釈し、新たな演出によって再提示し、本質を伝えることを目指した。その結果、初めての鑑賞者も楽しめるステージが実現するとともに、一流の演者と地域の芸能伝承者が一緒に舞台をつくり、地域の継承への新たなモチベーションの醸成に寄与した。

伊勢原公演
外国人の「講元」体験

高山公演
公演後の交流会

2 文化的効果

● 非営利組織の芸団協が企画・推進することで、各地で自治体や観光事業者、企業、文化保存団体、イベント制作団体など、様々な連携の関係をつくることができた。
● 都市部で質の高い舞台芸術を創造する人材と、地域で芸能を継承する人材が出会い、協働することにより地域芸能・伝統芸能分野の新たな演出や運営方法のノウハウが共有され、地域文化や文化財を活用したツーリズムの可能性が拡大した。
● 各開催地では「自分たちが守ってきた文化を外部の視点から再認識し、今後の活動への励みになった」という声が多く聞かれ、他地域での展開も企画している。

3 社会的効果

● 地域芸能の公演では、次世代の育成に課題を抱えていることから、若手の演者を起用するとともに地域の子供達に披露することで地域芸能の再認識へと繋げた。
● 公演後の交流会に外国人も参加し、通常の観光では体験できないような、地元住民との交流機会を提供することができた。

4 観光インバウンド拡充

● 訪日外国人も楽しめるノンバーバルの要素―画像や映像・実演を多く取り入れるとともに、英語によるパンフレットの配布を行い、外国人の日本文化への理解を深めることとなった。
● 通訳には地域の人材を採用し、普段では経験できない同時通訳業務等により、ノウハウの蓄積が図れた。

5 経済的効果

● 各地域の観光の基盤をつくることを目的に、自治体や観光事業者、企業、文化保存団体、イベント制作団体等幅広い連携が実現。文化財活用の体験を共有したことで、文化の観光コンテンツ化の促進が期待される。大手旅行会社や鉄道会社等との連携も実現し、インバウンド消費も含めて経済波及効果が生まれた。

古代から令和の時代までつながる文化を巡る奈良博覧プロジェクト

奈良県

◉プロジェクトタイプ：
主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：美術・文化財
◉開催期間：
- 万葉文化館「にぎわいフェスタ万葉」「万葉文化館展覧会」
  2019年9月28日～2020年3月31日
  （ただし2月28日～新型コロナウイルス対策のため休館）
- 「大立山まつり」奈良ちとせ祝ぐ寿ぐまつり
  2020年1月25日・26日

◉来場者数：
- 万葉文化館「にぎわいフェスタ万葉」「万葉文化館展覧会」
  17,116人（うち外国人 約90人）
- 「大立山まつり」21,367人

◉事業概要：
奈良県は古代から中世にかけての文化財の宝庫。2020年1月、世界遺産・平城宮跡を主会場に「大立山まつり」が開催された。県内39市町村の伝統行事やまつり、食文化が結集する大規模イベントに、2万人を超える人が訪れた。また、県では、県内各地への観光客誘致や周遊につなげようと、奈良県立万葉文化館で「にぎわいフェスタ万葉」や「万葉コレクション展」などの展示会を開催するなど、県内各地の文化資源を活用した事業と連携し、複合的に奈良文化の魅力を強くアピールしている。

オープニング風景

県内のまつりや伝統行事が集結

会場に設置された大立山（四天王像）

1 特徴的な取組

●「大立山まつり」には県内39の全市町村が参加し、奈良県全域にわたる魅力を発信した。県内の伝統行事や伝統芸能を披露する場を創出し、食文化の紹介、文化財の活用など、各地域の歴史文化資源を活用したプログラムを持ち寄ることで地域の活性化に繋げた。今後も県内全域の取組として継続していく意向である。

2 文化的効果

●古代奈良の文化を深く知ってもらうためには、伝統行事や食の紹介だけにとどまらず、様々なアプローチが必要になる。「大立山まつり」をはじめとする事業では、体験ワークショップ、住職による講話など、常に新しいコンテンツを積極的に導入した。

3 社会的効果

●「にぎわいフェスタ万葉」では、万葉文化館の設立趣旨である『万葉集』と古代文化への理解を深めてもらうため、古代の歴史を語る講談と音楽のコラボレーションコンサートや、和綴じ本づくり体験などを実施し、家族連れにも楽しんでもらえるよう工夫を凝らした。
●「大立山まつり」では、小さな子どもでも楽しむことができる紙芝居の実演や、奈良をホームとするスポーツクラブのチームキャラクターがまつりに参加するなど、子どもや地域住民にとっても身近なものとなるよう工夫した。

平群町・へぐり時代祭りの時代行列

4 観光インバウンド拡充

●県内には観光資源が豊富にある。そこで、庁内にインバウンド宿泊戦略室を設置し、インバウンド誘致に取り組んでいる。特に、県内39の市町村と連携した面的に広がりのある取組を実施し、訪日外国人に奈良公園周辺だけでなく万葉文化館や平城宮跡等を訪れてもらい、さらに県内を回遊してもらうことを目指す試みとなった。

5 経済的効果

●「大立山まつり」は、冬季の宿泊観光客を増やすことを目的に始まり、文化、食の体験プログラムを提供することにより、県内各地への回遊を誘うPRの場としての役割を担っており、県内での滞在の長時間化を目指している。また、「各地域の歴史文化資源を活用したプログラムを持ち寄ることで、総体として奈良県の良さを伝えながら、個々の地域もアピールでき、活性化につながる」とさらなる事業の拡充も計画している。
●豊かな文化資源を生かした奈良のさらなる広報と、通年の誘客に向け、PDCAマネジメントサイクルで事業を検証している。

外国人の参加者も

越後妻有雪花火／Gift for Frozen Village2020

大地の芸術祭実行委員会

◉プロジェクトタイプ：
主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：美術・文化財
◉開催期間：2020年2月29日予定
※開催に向けた準備段階でヒアリングを実施したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため直前に事業中止を決定した。

高橋匡太によるライティングインスタレーション
Photo by YAMADA Tsutomu

◉事業概要：
越後妻有（新潟県十日町市・津南町）で3年ごとに開催される「大地の芸術祭」は、里山を舞台に現代アートを制作展示し、過疎化・高齢化が進む地域の活性化をはかるアートフェスティバルの先駆けとして知られる。春は山菜、夏は水遊びや里山、秋は収穫や食、冬は雪をテーマに、企画展やワークショップ、公式ツアーなどを実施するプログラムとなっている。本事業はその一環であり、アートワークや花火、LEDが雪原を彩る。コンサートの開催や日本酒や地域の食材を使った飲食の提供もあり、地域の自然や伝統的雪国文化を発信している。

冬の夜空を彩る雪花火
Photo by YANAGI Ayumi

地元の人たちがもてなす雪見御膳

マ・ヤンソン/MAD アーキテクツ
『Tunnel of Light』

1 特徴的な取組

● 大地の芸術祭及び四季プログラムの狙いは、自然・景観や食を含めた生活文化など地域が持つ魅力を次世代、また国内外の人々に伝えていくことである。
●「雪花火」は、日本の雪国が誇る圧倒的な自然美と、国内有数の豪雪地帯であり、縄文時代から自然と共存しながら生きてきた雪国人の心を、現代アートと掛け合わせて国内外に発信するものである。

2 文化的効果

● 3年ごとの開催である大地の芸術祭を軸として、間の2年間に四季プログラムなどを実施することにより集客力が向上した。雪花火は前年度までに6回開催され、全国から5,900人が来場している。
● 地域住民は現代アートが地域の活性化につながるツールであることを認識している。

3 社会的効果

● 芸術祭本体をはじめ、事業実施においては、運営ボランティア組織やまちづくりNPO、地域住民、民間企業などとの幅広い連携でサポート体制を構築している。
● 地域住民は来場者へのおもてなしを楽しんでおり、市民協働の場、交流促進の場となっている。

絵本と木の実の美術館

4 観光インバウンド拡充

● 2020年の雪花火は中止となったが、民間旅行業者のバスツアーが19本予定され、そのうち3分の1が外国人観光客を対象とするツアーであった。なかでも現地での商談会に参加した台湾や中国等のアジアの訪日観光客を対象としたものが多い。
● 来場者が延べ54万人を超えた前回（2018年）のアンケート調査では、外国人来場者の割合が8.7％を数えた。鑑賞パスポートのネット販売を利用し、個人で訪れる外国人も多かった。しかも、芸術祭ボランティアとして関わる外国人も増え、全体の半数、約100～150人を外国人が占める。

5 経済的効果

● 大地の芸術祭を通じて、農業収穫体験など地域へのさまざまな支援活動が起き、芸術祭公式グッズや地場産品の開発・販売が進み、地場産業のブラッシュアップがはかられている。
● 市のふるさと納税制度において、芸術祭の地域活性化への寄付を対象メニューに加えている。
● また、交流人口の拡大による経済効果や、移住・定住者の促進などに寄与している。
● 海外へプロモーションに出かけるなど大がかりな集客を図る一方、担当者が地域に足を運び、住民とコミュニケーションをとりながら理解を求めるという地道な努力の積み重ねで、地域に根ざした芸術祭として、着実に成果を上げている。

「綴プロジェクト」―高精細複製画で綴る―スミソニアン協会フリーア美術館の北斎展

日英表記のチラシ

すみだ北斎美術館

◉プロジェクトタイプ：
主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：美術・文化財
◉開催期間：2019年6月25日～8月25日
◉来場者数：29,134人（うち外国人 約9,000人）

◉事業概要：
江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎――。その名は海外でもよく知られ、作品を所蔵する美術館は多い。すみだ北斎美術館では、高精細複製画制作プロジェクト「綴（つづり）プロジェクト」（正式名称：文化財未来継承プロジェクト）と連携しフリーア美術館（米国ワシントンD.C.）の門外不出の北斎肉筆画を高精細複製画で紹介するとともに、自館で所蔵する北斎の作品約130点を展示。また、江戸の生活文化に関わる体験型ワークショップを通して、北斎の絵を中心に日本の自然や文化の理解が深まる展覧会を開催した。

お点前体験

掛け軸の扱いを学ぶ

1 特徴的な取組

● 特定非営利活動法人京都文化協会が推進する「綴プロジェクト（文化財未来継承プロジェクト）」（2007年～）は、デジタル画像技術と表装等の伝統工芸技術を用い、屏風や襖絵等日本の貴重な文化財を高精細に複製して有効活用することを目的とする。この先端技術プロジェクトにより、今回、フリーア美術館（米国ワシントンD.C.）の北斎肉筆画コレクション13点の高精細複製画が制作され、里帰り公開となった。

2 文化的効果

● 複製画はオリジナル作品に比べ持ち運びが容易であるため北斎への関心が高い中、様々な場での活用が期待される。複製画を活用し学校等へのアウトリーチプログラムの開発も構想中である。

3 社会的効果

● ミュージアムグッズの約6割が墨田区内の企業製。講座室には、地元企業名を冠したり、企業へ画像を貸し出す等信頼関係の構築に尽力した。
● 毎年秋に開催される北斎祭りを、地元の町内会と協働で実施。「自分たちの館」という意識をもってもらう等、良好な関係を構築しており、地域の活性化に貢献している。

4 観光インバウンド拡充

● 館内講座室に畳を敷き、日英バイリンガルの説明で楽しめるお茶席体験や屏風、掛け軸の扱いを学ぶワークショップを実施。北斎ゆかりの地、墨田区に建つ美術館の特別にしつらえた和室の中で、江戸時代を感じられるそれぞれの体験は国外からの旅行客にも大好評であった。
● 施設ガイド、フロアーガイドは6言語（日・英・仏・韓・中国語簡体字・繁体字）、本展の作品解説は日英で対応。インバウンドの来場者が半数近くを占め、通常よりも多いインバウンドの集客に成功した。
● 今後、インバウンド対応をさらに拡充したい。

5 経済的効果

● 北斎が描いた日本の自然美を効果的に提示することで、描かれた日本各地への誘客効果に寄与している。今では見ることができない日本の姿が描かれている北斎の作品から、日本の自然を感じ、複製画の特性を生かした体験型の展示とすることで、特にインバウンド来場者に日本の自然や北斎に対する興味喚起と理解を深めた。

特別展「世界遺産をつくった大工棟梁―中井大和守の建築絵図細見」

茶室「蓑庵」実物大模型の組立工事見学会

千利休　妙喜庵待庵の茶室起こし絵図

大阪市立住まいのミュージアム

◉プロジェクトタイプ：
主催・共催型　分野別大規模プロジェクト
◉分野：美術・文化財
◉開催期間：2020年2月22日～2月28日
（新型コロナウイルス感染拡大防止に係る国からの要請を受け、計6日間のみの開催となった。）
◉来場者数：1,641人（うち外国人 848人）

◉事業概要：
日本の伝統的修復技術は美術工芸品や歴史的建造物などに幅広く継承されているが、その取組が公開されることは少なかった。今回、重要文化財の修復を行っている施設（当館、京都東寺宝物館、京都国立博物館・文化財保存修理所）が連携し、修復技術や修復例を展示する展覧会を構想した。本展は、プロジェクト第一弾として開催された特別展である。二条城や江戸城の創建に携わった京都の大工棟梁・中井大和守の建築絵図を6年かけて保存修理して、蘇らせた絵図をはじめ、中井家資料の修理技法を多角的に紹介した。

大工棟梁による実演

1 特徴的な取組

● 建築絵図（指図や起こし絵図）の展示に加えて、茶室起こし絵図にちなんで実物大模型の「蓑庵」も作成し、日本の貴重な文化財がどのような技や創意工夫によって伝承されているか、また、いかにして今回の修復がなされたかを伝えた。
● 日本の伝統的修復は、作品を構成する漆や和紙、木材など自然素材の様子や、用いられている技法、製作された年代等を見極め、作業が進められる。製作年代や用途に応じて使い分けている修復素材や道具などを展示して、修復のプロセスをわかりやすく掲示した。

2 文化的効果

● 中井正清とその子孫の建築作品のうち、現存するものは国宝や重要文化財に指定され、一部は世界遺産に登録されている。重要文化財「大工棟梁中井家関係資料」（中井正知氏・中井正純氏蔵）の建築絵図は、中井家の建築作品の全容を伝える貴重な資料。建物の平面図や立面図だけでなく、儀式図、庭園図、起こし絵図など多岐にわたる。資料は破損や老朽化が進み、平成25年（2013）から文化庁の指導監督の下、保存修理に取り組んできた。こうした取組みを綿密に紹介することで修復への興味と関心を喚起することに成功した。来場者からは「修復のプロセスがわかって面白い」という声が多かった。
● 修復文化財を軸に各施設が多様な展示をはかったことで今後の文化財修復成果の公開において、より多くの人に見てもらえるような働きかけ方などの可能性が拡大した。

3 社会的効果

● 65歳以上の大阪市民、中学生以下、障害者手帳等を所持している人（介護者1名を含む）を無料とした。小学生などの若年層も家族で訪れ、幅広い層の鑑賞者を呼び込んだ。

4 観光インバウンド拡充

● 通常でも来場者の6～7割は外国人。トリップアドバイザーのエクセレント賞も受賞し続けているが、その要因として、解説の多言語化はもちろんのこと、音声ガイドの日本語解説の内容を、それぞれの国の文化事情などを交えながら変えてきたことがあげられる。
● 台湾の人気ユーチューバーに館の紹介動画を配信してもらうことにより、台湾からの来館者が増えた。

5 経済的効果

● 各地域の風土・文化に根ざす文化財産の修復の紹介は、地方からの誘客に寄与するものである。
● 増え続ける外国人入館者のためにキャプションの多言語化や通訳付き大阪まちやツアーの実施を構想している。

展覧会のチラシ